

急速な人口の高齢化のため、高齢者の医療、保健、福祉に関連する諸問題への対応にスポットが当てられているが、疾病と障害をもつ子どもたちの存在を忘れてはならない。小児の理学療法といえは脳性麻痺と肢体不自由児施設を連想するが、医学の進歩によってポリオは消滅し、先天性股関節脱臼や骨関節炎は激減するなど小児の疾病構造は大きく変化し、それにともない医療機関も肢体不自由児施設から一般病院へと拡大している。しかし一般病院では、まだ脳卒中片麻痺や人工関節全置換術などの成人理学療法が中心となっているだけに、小児の理学療法を実施する際には考慮すべき点が多い。

本号では、一般病院において経験することのある疾患を取り上げ、児の成長を視野に入れた具体的な小児理学療法のポイントを臨床経験の豊富な方々から解説していただくことにした。

■大学病院における小児の理学療法の実態と留意点(菊地延子, 他論文)

大学病院リハビリテーション部の理学療法部門が対象とする小児疾患・障害の9年間の推移を調査した結果、小児新患者数が10%台から4%台に減少(特に外来患者)し、疾患・障害そのものが重症・重度化していることが判明した。この減少については、全国レベルでの肢体不自由児施設、小児専門病院の設置、各地域での保健所を中心とする乳幼児健診システムの充実化と異常児の早期発見、早期療育の定着化、社会現象としての少子化、出生数の減少などが影響していると考えられる。

■小児の脳腫瘍に対する理学療法(稲田里美, 他論文)

脳腫瘍は、組織型や発生部位の違いで様々な臨床像を呈する。診断・治療技術の進歩により生存率が向上してきている今日では、リハビリテーションへのニーズも高まってきている。訓練を進める上では、生命予後を考慮し、先を見越したゴール設定を行い、早期離床・早期退院を目標にADLの改善、QOLの向上を図る。そのためには、チーム内での役割、訓練の目的や意義を十分に考えなければならない。

■Perthes 病の理学療法(大城昌平, 他論文)

本論文はPerthes 病の治療について概説し、当院および関連施設において実施されている外転装具(abduction weight-bearing brace)による保存的療法と内反骨切り術を用いた観血的療法、およびそれぞれの理学療法、生活指導、治療成績について論述した。

■若年性関節リウマチに対する理学療法(伊藤フキ子, 他論文)

若年性関節リウマチ(JRA)は対象が小児であるがゆえに、成人の関節リウマチと症状が類似している。理学療法の内容、評価は異なる側面が多い。評価上の困難、訓練の工夫、心因的症状、母子関係、学校生活に向けての指導などについて自験例から得たことを含めて記述した。また、追跡調査の結果から、退院時のADL状態を家庭で維持している例が多く、退院までにADLを向上させることが重要である。

■二分脊椎症の理学療法(小山一信, 他論文)

正常な上肢機能および知能を有する二分脊椎症児にとって、自立歩行の可否は普通学校で教育を受け、健常者と共に社会生活を営む上で、大きな影響力を持っている。正確な障害レベル判定に基づき、乳児期は正常発達に沿った治療計画を立て、生後10か月頃から立位訓練を開始する。障害レベルおよび年齢や能力に応じた段階的な治療計画、適切な装具とアラインメントの調整により、小学校就学前にはロフトランド杖歩行、あるいは自立歩行を確立することが望ましい。各障害レベルに特有な変形・拘縮と筋の麻痺、未発達ならびに装具の問題点を理解し、幼少児という観点から親の協力のもとに積極的に理学療法を進めることが治療の要点である。